

## Paul Austerの*Leviathan* — 共同体的感覚の刷新 —

馬 場 雅 典

九州女子大学人間科学部人間文化学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2009年5月29日受付、2009年7月8日受理)

### 要 旨

本稿の論考はチャールズ・A・ライクの『緑色革命』の主張に負っている。ポール・オースターの『リヴァイアサン』で扱われる時間枠は1975年から1990年までであるが、作品の主要人物ベンジャミン・サックスの生き方は1960年代アメリカにその根がある。一つの見方として、この時代は「連邦レベルの政治と民衆や民衆運動指導者エリートの動きが緊密に絡み合っていた最後の時代だった。」サックスの一面は自己と世界の連携が可能な改革の気運に基づいている。その模範は父親たちの世代の共同体的生き方である。

同時に彼の意識は、ライクが第二次世界大戦終結後に兆候が見え始めたと言う統合国家（管理国家）を捉えている。「利己主義と不寛容」の1980年代のロナルド・レーガン時代は統合国家である。オースターはそのことをサックスの鋭敏な現実感覚として提示している。サックスの共同体的感覚は統合国家の規制を忌避する方法であった。

サックスの共同体的感覚は統合国家を相手にした闘いに敗れ、彼はこの世から消え去るが、サックスの生き方に同情的ではあるが、異なってもいる語り手ピーター・エアロンはその語りによって、サックスが温めていた共同体的感覚の刷新を提示している。

### I 1960年代の一つの側面：共同体的感覚

*Leviathan*は作家であるPeter Aaronによって語られる、サックスとその仲間の物語である。友人である作家 Benjamin Sachsは全米各地にある自由の女神像を爆破していく行動を重ねていく過程で自爆死する。ことの発端である自爆死は作品から推論すると故意である。サックスは過去の時代のある生き方を反映しており、それを新しい時代のなかで刷新することができずに追い詰められていく。3章の最後で、「もはや決して存在しないであろうものをするので、私はこの本に、サックスが自著に使うつもりだったタイトルをつけることにする。『リヴァイアサン』」<sup>1</sup>とエアロンが言うとき、彼もそのように考えていると見なすことができる。また、サックスも最後にエアロンと会って、失踪していた間に自分に起きたことを語り尽くしたあと、「もしその時が来たら、君ならこれを他人に語るすがわかるだろう。いったいこれがどういう話なのか、君なら伝えられるはずだ。」(265)と言っていることも遺言のように聞こえる。サックスに具現されている生き方とはどんなものだろうか。

サックスという人物を考えるうえで重要な情報は、彼が若くして出版した小説 *The New Colossus* に関するエアロンの評言である。エアロンの評言の中でも重要なものは次のことである。

1) エアロンは、「『新コロッサス』は六〇年代とはまるで無関係な本だったし、ベトナムとも反戦運動とも、あるいは彼が刑務所で過ごした十七か月とも無関係だった。」(41)と言いつつも、「当時ベトナムでいまだ戦われていた戦争を思い、その戦争ゆえにサックスが刑務所に入ったことを思えば、そうした怒りがどこから生じていたか見てとるのは難しくない。」(44)と、サックスを捕えていた怒りがやはりベトナム戦争への政府の対応であったと言っている。

2) 『新コロッサス』は「一八七六年から九〇年までのアメリカを舞台とする」歴史小説で、「入念な資料調査に支えられ、文書化された確認可能な事実に基づいて」(41)おり、「どの逸話も真実であり、現実根ざしているが、それでも、その組み合わせ方のせいで、それらはじわじわと幻想的な色合いを帯びていき、」「しまいには、作品全体が空中に浮遊しはじめるような印象を」(44) 与える。

2) に関しては次節で述べることにして、1) のことは、アメリカ史との関連では次のようである。当時、ベトナム戦争への反戦運動が激化し、「学生大衆は、共産主義に対する闘い、といったジョンソンの論理を共有せず、むしろベトナムで子供たちを殺すことがいかにまちがっているか、といった感覚的な側面から反戦感情を強めていった。」<sup>2</sup> ファニーと知り合ったのが反戦デモにおいてであったことから、サックスもそのような学生の一人であったと考えてよい。

しかし、『新コロッサス』の記述が自由闊達であることを考えると、怒りだけではなく、もっと積極性を与えてくれるバックボーンがあったと思われる。それを考える上で、秋元英一氏と菅英輝氏によって「1960年代の歴史上の位置」に記述されていることは大いに参考になる。

1960年代は、連邦レベルの政治と民衆や民衆運動指導者エリートの動きが緊密に絡み合っていた最後の時代だった。黒人の諸権利獲得闘争が前の時代の準備局面から本格化し、それがほかの運動に点火する役割を果たした。そのさい、連邦政府が実質的なバックアップをしていたことが、この運動成功の鍵の一つだったとみられる。(中略) 世代的には、1930年代、ローズヴェルトのもとにはせ参じた青年改革者たちのなかで、政治へのコミットを続けていた人々の発言がシニアの立場から重みを増していた。<sup>3</sup>

これは、個人の立場に立てば、個人が世界との連携を信じるができたということであり、そして年配者がそのような社会の維持に貢献したということであろう。

Paul Austerの *The Invention of Solitude* で不動産業に携わる父親にはこのようなイメージ

が付与されている。

間借人に対しては寛容だった。家賃が少しくらい遅れても大目に見たし、職探しを手伝ってやったり、子供たちに服を与えてやったりもした。間借人たちも父を信頼していた。強盗に入られるのを恐れた老人たちは、大切な所有物を父に預け、オフィスの金庫に保管してもらった。困ったことがあると、人々は兄弟のうちまっさきに父のところへ行った。誰も父をミスター・オースターとは呼ばなかった。みんながミスター・サムと呼んだ。<sup>4</sup>

『孤独の発明』で、父親の突然の死に直面し、最初は得体の知れない父親像しか見えなかった息子が捜し求めた末に見出すのはこのような父親像である。これは共同体的感覚に基づく生き方と言えよう。しかし、息子はそのような父親の生き方が崩れたと書く。

年月が経つにつれて、商売は下り坂に向かいはじめた。やり方に問題があったのではない。このような商売自体が成り立たなくなっていったのだ。あの特定の時代に、あの特定の場で生きつづけることが、もはや不可能になっていったのである。(中略)かつては父にとって、ひとまずやりがいのある仕事と呼べた活動が、いまや単に骨ばかり折れる単純作業となっていた。<sup>5</sup>

そして、「自分が悪い息子だったことがいまの私にはわかる。」<sup>6</sup>という認識に至る。つまり、父親の価値観が息子によって共有されることになる。

『鍵のかかった部屋』で、父親の死が間近に迫ったある日、Fanshaweが共同墓地の棺を入れる墓穴の底に身を横たえて父親の死を想像し、一体感を渴望するのこのような父親像と思われる。毎日遅くまで働き、時には週末の土曜も日曜でさえ休まず働く仕事人間であるファンショウの父親は、かつての共同体的価値観が通用しなくなった『孤独の発明』の父親と同じ状況にあるとみなすことができる。<sup>7</sup>

サックスの父親も以上の二人の父親と同等の性質を付与されている。サックスは「父親が三〇年代に携わった、社会主義者としての政治活動に関しては、いつも誇らしげに語った。」(30)「サックスの父親は母親よりも物静かで捉えがたい人物で、自分の内にこもっていて、何を考えているのかあまり他人に明かさない性格だった。それでもなお、サックスと父とのあいだには強い絆があったと私は思う。」(30)とエアロンは書き、その根拠として、兵役拒否によって息子が逮捕されたとき、父と息子の世代間の対立を記事にしようという魂胆で訪ねてきた新聞記者に対して、父親が息子への誇りを表明して記者を退散させているエピソードを挙げている。サックスの父親に見出させるものも、先述の二人の父親と同じ、困難では

あるが個人と世界が連携する観点を失わない生き方である。重要なことは、当事者がともに苦しむ感覚、換言すれば共同体的感覚を息子たちが父親の世代から受け継いだということである。サックスはそのような価値観を持っている人物である。

## II 1960年代のもう一つの側面：統合国家

なぜ、共同体的な生き方はサックスに付き纏うことになったのか。

それはチャールズ・A・ライクの言う統合国家の誕生と関連していると思われる。ライクによると、「そのおもな兆候は第二次世界大戦終結後、とりわけ五〇年代のうちに姿をあらわしはじめた。」<sup>8</sup>以下は、ライクによる統合国家の特徴である。彼はニューディールが「諸活動が“公共の利益”に従属することを要求し」、「この要求は、商業的・技術的大衆社会の要請が決定づけた方向にそって、しだいに、ますますきびしい規制にむかうことを意味するようになった。」と言って次のように続ける。

また“政治”国家を“管理”国家によって代置することをしだいに意味してきた。“政治”国家とは、現代的な意味では、多くの相違点、対立、多様な文化などが、政治過程のうちにあらわれる多元的な諸要素だとみなされ、それぞれが自分独自の生命を全体の政治体のなかで許されているような国家のことである。だから、政治国家では、政治的ラディカルたちも、マリワナ使用者も、文化的に特殊なグループも、すべてが共存し、政治発言を行ない、国家の多様性と均衡とに寄与するはずである。こうした“政治”モデルは、“拮抗”モデルとも呼ばれるが、それは実際の拮抗現象がかず多く存在するというのではなくて、拮抗する意見や生活様式が共存できるということである。管理という概念は、拮抗を社会におけるのぞましい要素として考えることを拒否する。(中略)多様な変化は、なにもかも“公共の利益”に順応させようとする努力のなかで妥協させられ、鎮静させられるのである。この社会は“公益”に適合しないものを“逸脱”と規定する。マリワナの吸飲は犯罪とされ、それを使用する人間は処罰され、治療され、または“救いの手”をさしのべられる。<sup>9</sup>

共同体的な生き方がなぜサックスに付き纏うことになったのかを考える前に、ライクの記述のうち『リヴァイアサン』と関わるころは、記述の最後で公益に適さない人間は処罰されるということである。「処罰」ということばは『リヴァイアサン』の中で3度使用されている。1つはファニーが子どもの生めない身体なので、サックスは彼女を罰するために多数の女性と関係を持っていると彼女が考えていることを述べる時。2度目はマリアが自分の名前をサックスが覚えていないために彼を罰そうとして、自由の女神建造百周年記念祭の時彼を誘惑し、それが落下事件の誘因になったことをエアロンが述べる時。3度目はサッ

クスが姑息な政治的手段に訴えて、マリアへの欲望を満足させたことに対する罰として自分は落下したのだと考えていることをエアロンに語るときである。

これらの反応はライクの管理国家のシステムが民衆に影響している結果ではないかと思われる。そして、これと「利己主義と不寛容、力こそ正義と信じて疑わぬ愚かしいアメリカ至上主義、といった昨今の風土」(116)と描写されているレーガン時代は連関しているように思われる。

ベトナム戦争に際しての管理国家システムに対して多くの若者たちは次のように反応した。

1967年10月、現実にはベトナム徴兵阻止週間が宣言され、徴兵検査事務を行うカリフォルニア州オークランドの建物前で大規模なデモが行われ、(中略)「抗議から抵抗へ」のスローガンのもと、運動が激化した。ただし、個人的に徴兵を避ける努力のほうにさらに広汎に試みられた。結婚して子どもをもつ、なるべく長く大学に在学する、兵役不適の診断を出してくれる医者を見つける、ホモだと偽る、などなど。<sup>10</sup>

若者たちの間で見られた一つの現象は、管理国家の規制を忌避する一形態であったろうが、サックスがそのように考える人間ではなかったことは、サックス自身が初対面のときエアロンに語っている。彼がそのような選択をしたのは、「個人的に徴兵を避ける」という生き方の選択は、個人と国家の非連携の可能性を秘めていると彼が感じたと同時に、国家は常に管理を強いると感じていたからと考えてよいだろう。前節で、『新コロッセウス』の特徴として、「どの逸話も真実であり、現実には根ざしているが、それでも、その組み合わせ方のせいで、それらはじわじわと幻想的な色合いを帯びていき、」「しまいには、作品全体が空中に浮遊しはじめるような印象を」(44)与えると指摘しておくに留めた問題に立ち返ると、その理由はサックスの作品構想に管理国家の規制に反抗する姿勢があったからと思われる。そして、同じ思想が、実生活においてはサックスに共同体的な生き方を保持させることになったと思われる。

### Ⅲ サックスの共同体的感覚の崩壊

オースターは1987年のインタビューの中で、『ニューヨーク三部作』に触れて、「描かれている状況が、普通の意味では現実でなくても、現実的心理にはいくらか沿っていると思う。」<sup>11</sup>と言っている。

別のインタビューでは、同じことをさらに具体的に語っている。

偶然は現実の一部だ。我々はつねに偶然の力によって形作られている。生きているかぎり、予期しない出来事が、茫然とさせられるほどの規則性で起こりつづける。それな

のに、小説は想像力を駆使しすぎではないという考え方が広く行き渡っている。一見「ありそうもない」となると、決まって不自然だとか、人工的だとか、「非現実的」とか見なされてしまう。(中略) いわゆる現実的な小説の約束事にどっぷり浸かってきたせいで、現実感覚が歪んでいるんじゃないかな。あの手の小説では何もかもが平らに均され、独自性を奪われ、予測可能な因果律の世界に箱詰めされている。<sup>12</sup>

オースターが上の引用で意味している現実感覚は、『リヴァイアサン』において、管理国家的性格を強めていったレーガン政権時代におけるサックスの自省として現れる。彼の内省において、自由の女神建造百周年記念祭のパーティーのときの落下事件をきっかけにして、1951年のサックス6歳時の自由の女神登頂とベトナム戦争徴兵忌避が繋がる。それは以下のようである。

花火を見ることにかこつけて、肌を露わにした服装のマリアの身体に触れたい欲望を覚えたサックスは、マリアが自分に触れざるを得ない状況を作り上げることによって妻への裏切りを覚えずに欲望を満足させるという行動に出る。巧妙に状況を操作して自らの手を汚さずに欲望を満足させたことが、サックスに6歳時に自由の女神像の松明まで登って恐怖のため降りてくることができなかった記憶を呼び起こす。サックスの母親は手すりが無い階段を降りることができずにパニックに陥った。しかし、落下事件を振り返り、「こうした高い場所を生涯怖がってきたことを思うと」(129)、手すりを飛び越えた自分の行為に驚いたと告白しているところから察するとサックスも同様だった。ただ、母親が恐怖を露わにしたからサックスの恐怖は浮き彫りにされなかった。

その日は母親はサックスに半ズボンの着用を強要した。それに反発を覚えたサックスはさらに女神像の上方に昇るのを決行した。これは母親の独裁という現実からの飛翔と受け止めることができる。現実的結果は恐怖で足がすくんでしまった。

サックスにとっての問題は、母親の恐怖を利己的に利用したことであって、何を犠牲にしても遮二無二欲望を満足させる自分であった。これが彼が意識の薄暗い部分に隠しておいたもので、それが落下事件によって新たに明るみに出たのである。

これは管理国家が個人を追い詰め、強制することではないか、ということが恐らくサックスの意識に沸きあがってきて、払拭しようにもできないことである。というのは、このあとの長い沈黙の内省のあとに、彼は個人と世界の連携を遠くに押しやった、意識的に個人的な生活を送ろうとするジェスチャーを示すからである。彼がヴァーモントの別荘にエアロン夫婦を招待し、厚遇する際の徹底さはそれを表している。

そのあと作品で提示されていることは、自分と世界の連携から生まれる実りというサックスが持っていた幻影を明るみに出すことだけである。ベトナム戦争の徴兵拒否で刑務所に入れられることを選択したのは戦地に赴いて実際の加害者になりたくなかったからである。彼

はエアロンとの初対面のとき言っているように、兵役を巧妙にすり抜ける同時代人たちは潔くないと考え、また加害者になることも拒否して刑務所に入った。彼は自分が過去にとった行動に疑念を持ったことは無かった。しかし、それが幻影であったという清算を強いられる。

彼にとってディマジオの殺害事件はそのような関連を持っている。ディマジオに殺害されるDwightが死の直前にサックスに見せるのは共同体的思い遣りである。そのときに「共感」(169)という語が使用されている。この語はサックスがファニーとの結婚生活で彼女に対して感じている絆に言及している箇所で使用されている語である。つまり、サックスの生き方の本質を表わしている。ディマジオはサックスが忌避したベトナムでの実際の戦闘体験者である。ディマジオによるサックスの性質の体现者であるドワイトの殺害は、アメリカ政府によって命じられた殺戮の習慣的行動であるという意味で管理国家の絶大な威力としてサックスに映じたとしても不思議ではない。そうであれば、このとき、ディマジオ殺害によって、少年期から壮年期までを通じてサックスが温めてきた、個人と世界の連携を信じる共同体的価値観が幻影と化したと言えるだろう。

オースターが先に引用したインタビューで意味していた作品に描こうとしている現実感覚は、『リヴァイアサン』の場合、以上見てきたように、管理国家における個人と世界の連携の困難さである。

#### IV エアロンの語りのリアリティ

サックスは「統一原理を見出した」(256)とエアロンに言う。しかし、ライクの言う統合国家の政府が、マスメディアという大企業を使って、生きかたへの警告を民衆に発することを目的としたサックスによる自由の女神のレプリカ爆破をテレビのショーと化してしまうことを考えると、彼の本音は自分のやっていることの意義を信じることが出来ないということであろう。そのような威力に対して彼が武器として持っているのは「共感」だけである。ディマジオへの取り返しのつかない罪に対しても彼に成り代わって生きるという、やはり志半ばにして命を奪われた者への「共感」である。「言葉と物は、(サックス)にとってぴったり調和していた」(55)とも、「書くことはサックスにとって、驚くほど痛みのない作業だった」(55)ともエアロンは言っている。これらは、自己と世界が連携しているサックスの感覚を表わしていると同時に、作家としてのサックスに災いする。「僕の問題は、この仕事の意義を自分がどうしても信じられないことだった。」(265)という彼のエアロンへの告白は、「共感」という価値観の不十分さを表わしている。

その不十分な理由をオースターはエアロンの生き方を導入することによって提示している。エアロンもこの感情に囚われるときがある。ファニーとの不倫の後、サックス夫婦それぞれから二通りの説明を受け、どちらも真実を語っていると感じ、「責めるべき人間もいなければ擁護すべき人間もない。唯一正当な反応は共感だった。」(109)と言うときである。

しかし、エアロンにはサックスに無いものが与えられている。サックスは世の中に出るのにエアロンと違い、さほど苦労していない。オースターはジョゼフ・マリアとのインタビューで、『ニューヨーク三部作』は、「ある種の過剰な情熱をめぐる作品だと言えるだろう。」<sup>13</sup>と言っているが、エアロンにもそれが原因と思われる特徴を指摘することができる。ファニーとの不倫の件でサックスとの和解が一応出来た時点で彼が示す、ファニーとうまくやらなければ殺すと強い語気をこめて言うところと、サックスと連絡を取り合っていたことをマリアが隠していたことに対して、やはり殺したい気持ちだったと激情を示すところである。サックスの優しさに比べれば異常な反応である。しかし、このような激情を秘めているゆえにエアロンは、自分を突き放すことができている。つまり、サックスの「共感」は自分だけの世界にこだわることを意味する。エアロンはそれに対して、共感を示しながら、自他の区別を緩めることはない。彼の語りはその証左である。それによってエアロンは、サックスには書けないであろう日常生活の実質を与えることに成功している。

ファニーとエアロンの関係でそれが見出せるのは以下の一節である。

要するに、ファニーは私を私自身から救うためにわが身を投げ出してくれたのではないか、ということだ。あんな真似をしたのも、私がディーリアの元に戻るのを妨げるためだったということだ。そんな話がありうるだろうか？ 誰か他人のために、人はそこまで尽くせるだろうか？ もしそうだとしたら、ファニーのしてくれたことは素晴らしいと言うほかない。純粹な、神々しい自己犠牲の行為にほかならない。何年ものあいだに私はさまざまな説を検討してきたが、この説が一番好きだ。だからといってそれが真実だということにはならないが、真実でありうる限り、これが真実なのだと考えることで私の気持ちは和む。11年経ったいまも、唯一これだけが、納得の行く解答なのだ。(98-99)

ファニーへの共感、Deliaとの夫婦関係に終止符を打ち、復縁しそうになるとき彼女が適切な助言をしてくれたために、エアロンにとって大きな存在であったからというだけではない。ファニーはサックスがディマジオを殺害した後、頼りにして訪ねて来たとき、彼を裏切ったままあとに残されたことから生じる彼女の苦悩を感じ取っているのである。エアロンの語りがなければ、ファニーの名誉は回復することがない。上のエアロンの語りは、ファニーが不名誉の汚名を着せられたままになることから救いたいという同情を、感傷を抑制して表明したもので、これによって、彼女は日常的なリアリティを獲得している。

サックスとエアロンの関係でも日常的リアリティが獲得される瞬間がある。

君は僕がやっていることをやめさせようと説得に努めるだろうし（君は僕の友だちだから、それが友としての僕に対する義務だと考えるだろう）、僕は君と言い争いたくない。

いまの僕は、人と議論をする気にはなれないんだ。君が僕のことをどう思ったかはともかく、話を聞いてくれたことには感謝する。この物語は語られる必要があったのだし、聞き手として君よりふさわしい人間はいない。もしその時が来たら、君ならこれを他人に語るすがわかるだろう。いったいこれがどういう話なのか、君なら伝えられるはずだ。（中略）君は僕よりずっと遠くまで進んだんだ、ピーター。僕は君の無垢を素晴らしいと思う。生涯ずっと、ひとつの仕事を君がやり通してきたことを素晴らしいと思う。（264-65）

ここには相手の気持ちを傷つけないというサックスの思い遣りがある。しかし、その気持ちの背後には、エアロンがいつかは自分のとった行動を反芻して、他者として自分を理解してくれるだろうという信頼がある。ここでは自分と他者が釣り合った状態で意識されている。ここで日常的な人間関係においてサックスが初めて見せたリアリティをエアロンは提示している。

マリアが日常的リアリティを獲得する瞬間は以下の箇所である。

「ベンのことだろうね。君、まだ彼のことを想ってるんだね？辛かったろうな、あの人はあたしに恋したのよって友だちから言われるのは」

マリアは不意に顔をそらした。やっぱり、と私は思った。だがそれを認めるにはマリアはプライドが高すぎた。（269）

マリアはサックスが自分だけに救いを求めてきたことを心底喜んだ。サックスはそのような形で、彼女が一度も感じたことのなかった、自分の実在感を与えてくれた。サックスが、自分以外の女性に心を奪われることはマリアにとって耐えがたい。しかし、彼女は顔を逸らすだけに留まる。

以上の人物たちの描写で彼らに日常レベルでの実質感を与えているのは、人間への共感を保ちながら、自他の区別に決して甘くないエアロンの人間性である。この語りの萌芽は、彼が大学以来初めてサックスの家でファニーに会ったとき、出し抜口に口にしたことに対する反省のなかに既に見える。

自分としては、過去のふるまいを詫びようというつもりだったのだと思う。だが言葉にしてみると、最低な感じに聞こえた。どんな状況であれ、こういう科白は絶対口にすべきではない。特に、軽薄な調子を装って言うのは最悪である。言われた方には大きな重荷になるばかりだし、良い結果が生じる可能性はまったくない。私がこうした言葉を発したとたん、ファニーがその露骨な物言いに仰天しているのがわかった。（51）

エアロンは、自分を他者の中で定位づけるこのような態度をサックスとの付き合いのなかで発展させたのであり、それはサックスが成し遂げることができなかった、日常のなかでの共同体的感覚の刷新であると思われる。

## 結論

『リヴァイアサン』は1960年代のアメリカの記憶をサックスという人物に具現させて、1980年代の「利己主義と不寛容、力こそ正義と信じて疑わぬ愚かしいアメリカ至上主義」という管理国家の時代に生きさせ、共同体的感覚に基づく自己と世界が連携する生き方が困難であることを示し、エアロンの語りにその刷新を暗示した作品である。このような構想は、サックスの生き方を探る過程で言及した『孤独の発明』や『鍵のかかった部屋』と同じであるが、『リヴァイアサン』においては、十分に肉付けをされて展開され、エアロンの語りに現実と思える実質感を与えることに成功している。

## 注

<sup>1</sup> Paul Auster, *Leviathan* (Penguin Books, 1992), 159. 以下、この作品からの引用はこの版による。日本語訳は柴田元幸氏の訳を拝借した。ポール・オースター『リヴァイアサン』柴田元幸訳、新潮社、平成14年。

<sup>2</sup> 秋元英一・菅英輝『アメリカ20世紀史』東京大学出版会、2003年、250頁。

<sup>3</sup> 秋元・菅 236頁。

<sup>4</sup> Paul Auster, *The Invention of Solitude* (London, Boston: Faber and Faber, 1982), 57. この作品の日本語訳は柴田元幸氏の訳を拝借した。ポール・オースター『孤独の発明』柴田元幸訳、新潮社、平成8年。

<sup>5</sup> Auster, *The Invention of Solitude*, 59.

<sup>6</sup> Auster, *The Invention of Solitude*, 60.

<sup>7</sup> ファンショーの父親は、自分の所有物にこだわる母親の独裁主義と対照的に描かれている。ファンショーが家庭から失踪するのも妻Sophieの束縛的な性質からの逃避とみなすことができる。その根拠として、語り手はソフィーとの愛が結晶するさまを美しい文章で綴るが、そのあとソフィーは夫のファンショーを亡き者にして語り手を私物化する姿勢を見せる。

<sup>8</sup> チャールズ・A・ライク『緑色革命』邦高忠二訳、早川書房、昭和51年、94頁。

<sup>9</sup> チャールズ・A・ライク 104頁。

<sup>10</sup> 秋元・菅 251頁。

<sup>11</sup> Paul Auster, "Interview with Joseph Mallia," *The Art of Hunger* (London: Faber and Faber, 1997), 280. 日本語訳は柴田元幸氏の訳を拝借した。ポール・オースター『空腹の

技法』柴田元幸・畔柳和代訳、新潮社、平成16年。

<sup>12</sup> Auster, “Interview with Larry McCaffery and Sinda Gregory,” *The Art of Hunger*, 287-88. 日本語訳は柴田元幸氏の訳を拝借した。

<sup>13</sup> Auster, *The Art of Hunger*, 281.

## Paul Auster's *Leviathan*: The Renewal of A Sense of Community

Masanori BABA

Department of Humanities, Faculty of Literature, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

### Abstract

I owe the controlling idea of this paper to Charles A. Reich's *The Greening of America*. The time frame of Paul Auster's *Leviathan* is from 1975 through 1990, but the central character Benjamin Sachs's inner state is rooted in the 1960s. According to one viewpoint, this era is said to have been the last period in America when the policies of the Federal government and movements of the people and leaders of the people were closely intertwined to produce fruitful results. One side of Sachs is rooted in the trend of this era, which is characterized by the sense of community of his father's generation.

At the same time, he shows a consciousness of his being circumscribed by "the corporate state" or "the administrative state." According to Reich, "[t]he major symptoms" of this administrative state "started appearing after the conclusion of the World War II." Ronald Reagan's era of "selfishness and intolerance" is one such symptom of "the corporate state." Sachs finds that through his sharp sense of reality, he took the same attitude now as he did when he was six years old and succeeded in keeping his honor intact. As a result, he realizes that his sense of community has been a device through which to evade the regulations of "the administrative state."

However, Sachs is defeated by the power of "the administrative state." His friend and the narrator of this story Peter Aaron feels compassion for him, and his narrative is a paean to the renewal of Sachs's long-nurtured sense of community.